

19歳以上の人生なし

護国の”英霊”となり靖国神社へ —— 村中の期待を一身に受け

■ 柳 沢 明 朗 ■

父は職業軍人、大正天皇は父たちの軍歌で目覚めたという。1936年、日中戦争勃発のバネとなった「2.26クーデター事件」を指揮した近衛3連隊の将校集団だった。もっとも父はその2年前、自動車に轢かれそうな老人を救って亡くなっていた。私が注われて9ヶ月、母は24歳で未亡人となり、東京から高崎市外に帰り、教壇に復帰して私を育てた。

「この村から今度、靖国神社に祭られるのはアキラだ」「親の跡をついで陸軍士官学校出の優秀な将校になるんだんべ」「敵の戦車がきたら部下の代わりに爆弾を抱いて体当たりするってアキラがいったが、うれしいの」—— “一人っ子”の孫のことを祖母のところに遊びにきた村人たちは励ましのおもいをこめ、村の誇りだと語っていく。これが毎日繰り返された。

母も同じで、軍國の母、軍神の妻、天皇の教師の典型だった。すべてが優秀な将校になるためにと私を追い立てた。低学年から漢字を父の仏壇の前で毎日、暗唱させられた。失敗するとヒザをつねられる体罰つきだ。夏でも将校は上着を着るからと学生服を着させられたり、寝相が悪いと姿勢が崩れるからと、布団の四隅に紐で手足を縛って寝させられた。小学5～6年頃で、どこからかみつめてきた陸軍幼年学校の受験問題集を練習し始めた

ころだった。空襲警報になると、母は学校防衛隊として駆けつける。闇米の入った缶を庭のつつじの根元にうめて、「お母さんが帰ってこなかったときは、掘り出して食べて」と自転車で真っ暗な道を隣村へ出かけていった。私は父の形見の軍刀をもって自分が掘った防空壕に祖母と入ってふるえていた。

母の教え子が泊まりにきたことが2度あった。特攻隊で近日中に出撃するのだという。私は心からの尊敬の眼差しでハシャイだ。軍神が泊まりに来ている。．．．と近所中に言いふらしたい思いがして興奮していた。なんの疑問もなく、カッコいい先輩に明日の自分を重ねていた。(後のことになるが、金沢区でのぞうれっしゃの合唱練習のときに、子どもたちにその時のことを母が話してくれた。「良く出来る子だった」と母らしい言い方で悔しさを表現していた)。後日、2人とも母校の上を超低空飛行で翼を振って飛び去ったという話を聞いて、私の感動は頂点に達するばかりだった。

人生の進路がぶっ切れたのは敗戦だった。360度の価値の転換が起きた。1本の羽根より軽いと信じていたいのちが地球より重いということを知った。

戦前と戦後の一番大きな違いは、このいのちの扱いだと思うのだ。

権力はそこのところを、マインドコントロールしてすべての国民を侵略戦争に駆り立てていく。そこには自らのいのちの尊さも、アジアの人々のいのちの尊厳も視野には無い。

「いのちを惜しむものは国賊だ」と国中が合唱した。女々しいことはとても言えないし言えば警察に密告された。とても今では考えられないことなのだが、この体制のなかで私も本当に心からそう思うように育てられていった。

狂気としか言いようがないこの社会。一粒種の形見の私にも”19歳以後の人生は無
天皇に捧げよ、潔く死ね”と、本気で母や祖母はいった。親戚中がいった。村人たちもそ
うだ。教師も学校も。

何故、そうなったのか？ を解かねばならないと思いつづけてきた。

この狂気は、少なくとも「自分の頭で考える自由」が奪われたり、その権利を投げ捨てたりした場合に、生まれてくるのだと思えてならない。だから、自由に語り合い、考え、ともに生きる仲間がいることが、私の至宝と思うばかりだ。なにより地球上のすべての人々のいのち、人間の尊さを語り合えるからだ。